

Ladder

平成23年4月25日 第15号

北海道教育庁学校教育局

参事(生徒指導・学校安全)

中1ギャップ・高1クライシスを解消するために

Q 中学校1年生の不登校の未然防止のため、年度当初にどんな取組を進めるとよいのですか。

本資料の7号で紹介したとおり、中学1年生で不登校となった生徒の約半分は、既に小学校時代に何らかの形で学校を休みがちであった児童であることが明らかとなっています。

小学校時代に不登校の経験がある生徒は、4月当初から欠席が目立ち始めることもあることから、中学校の教職員が、小学校時代に学校を休みがちであった生徒をしっかりと把握し、不登校の兆候が現れ始めたら、早期に組織的な対応ができるよう、校内体制を整えておく必要があります。

また、不登校の背景として、学業不振が考えられることから、各教科等において、「分かる」という充実感や達成感を与え、学習指導要領に示す基礎・基本を確実に身に付けさせる指導方法の工夫・改善を図ることが大切です。

中学校における年度当初の対応例

1 基礎的情報の収集と分類

- ① 新中学1年生の全生徒について、小学校4～6年生時の欠席状況の情報を入手する。(3月末)
- ② 不登校の「経験あり」群、「経験なし」群等の分類を行っておく。

基礎的情報の収集と分類は、この後に続く一連の対応のための出発点です。事前に情報が分かっていたら、速やかに適切な対応をとることができます。「経験あり」群を明確にしておくことは、とりわけ重要です。また、2年間以上継続して不登校であったような生徒に対しては、特に配慮が求められます。

2 チームによる対応

- ① 「経験あり」群の場合、早期に(例えば、累積欠席日数が2日になった時点)対応チーム(生徒指導主事、養護教諭、学級担任、スクールカウンセラー等)を発足させる。
- ② 本人や保護者との対応、その反応等を記した個人記録票を作成する。
- ③ スクールカウンセラー等による見立て(情緒的混乱か否か)を行い、それに応じた対応責任者を決定する。
- ④ 週に1回程度のチーム会議を行う。

不登校を未然に防止するためには、一部の教師やスクールカウンセラー等の個人まかせにするのではなく、学年全体、学校全体でかかわることが重要です。

そのため、生徒が休み始めた時点からの、本人や保護者との対応、その反応等について記録をとり、スクールカウンセラー等による見立てや定期的なチーム会議において、より適切な対応方法を考えていくことが大切です。

3 対人関係の改善

- ① 苦手意識を克服させる。
- ② 自己有用感・自己存在感を獲得させる。

学校は、児童生徒が不登校とならない、児童生徒にとって魅力ある学校づくりを主体的に目指すことが重要です。具体的には、自己が大切にされている、認められている等の存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる「心の居場所」の確保にとどまることなく、教師や友人との心の結び付きや信頼感の中で主体的な学びを進め、共同の活動を通して社会性を身に付ける「絆づくりの場」としての魅力ある学校づくりを目指すことが大切です。「居場所」は主に大人がつくり、子どもに提供していくものですが、「絆」は、特別活動を中心に、子どもが主体となって取り組む共同的な活動を通して、子ども自らがつくりあげていくものです。

4 学習面の改善

- ① 「分かる」授業を実施する。
- ② 習熟度別・少人数の授業を実施する。

不登校に関しては、学習の問題よりも心の問題がクローズアップされがちですが、学校生活の大半は教科の授業であることから、「分かる」という充実感や達成感を得られるような授業の工夫や、習熟度別や少人数の授業など個に応じた指導の充実などにより、日々の授業の工夫改善を進めることは、不登校の未然防止には欠かせない取組です。

特に、学習が遅れがちな子どもに対しては、個々の子どもの適切な実態把握に基づき、例えば放課後等に補充学習を行うなど、それぞれの状況に応じたきめ細かな指導に努めることが大切です。

中1不登校生徒調査

国立教育政策研究所生徒指導研究センターでは、不登校生徒数が中学校1年時に急増することに着目し、その未然防止を図るための研究を行い、特に中学校の4月から夏休み明けまでの対応について、どのような点に注意しながら対応を進めていけばよいのかを「中1不登校の未然防止に取り組むために～平成13～15年度『中1不登校生徒調査』から」(平成17年7月)にとりまとめています。

この資料は、<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/3.htm>から入手できます。

「Ladder」は学校間の接続を図る「はしご」を意味しています。